

友人同士3者間会話における スピーチレベルシフトについて —上下関係のある親しい友人同士の 会話データをもとに—

劉 雅静

要 旨

本稿は、従来あまり考察されていない友人同士3者間の自然会話をケーススタディとして、上下関係のある親しい友人同士の会話におけるスピーチレベル操作がどのように行われているかを解明することを目的とする。その結果、以下のことが観察された。(1)上下関係のある親しい友人同士3者間の会話において、親疎関係より上下関係の作用が優位に働いている。(2)「ダ体」から「デス・マス体」へのスピーチレベルシフトは、常套句／会話終了時の合図、相手への非難、対立する立場や意見の提示の3つの場合に観察された。その機能として、話し手が相手と心的距離をわざと置くことによって自分の意見を堅持する戦略として用いられることが分かった。(3)「デス・マス体」から「ダ体」へのスピーチレベルシフトは、自分の意見や心情を一方向的に表出する場合と繰り返しの場合に観察された。その機能として、相手の立場や意見との関わりが薄く、聞き手のことを特に意識していないことを示すことが分かった。

キーワード

スピーチレベルシフト 友人同士 3者間会話 親疎関係 上下関係

1 はじめに

日本語は敬語体系を有する言語であり、会話の場面や相手との関係によって、会話中にスピーチレベルを選択・操作することが求められる。日本語学習者が日本語会話において円滑なコミュニケーションを行うためには、日本語のスピーチレベルの選択・操作について正しく理解し、そして適切に運用することが重要である。特に上級学習者になればなるほど、言語知識の拡大と対人コミュニケーションの深化につれ、言語知識と言語運用のバランスが取れたコミュニケーション活動が求められる。アクドーアン・大浜(2008)が指摘したように、親しい友人関係においても適切な距離感や言語使用が存在し、適切な行動をとらなければ摩擦や誤解が生じる危険性がある。

本稿では、日本語の友人同士会話におけるスピーチレベルを考察対象とする。本稿のデータは、従来考察されていない上下関係のある親しい友人同士 3 者間の会話を用いる。本稿は 1 つのケーススタディとして、友人同士 3 者間会話におけるスピーチレベル操作がどのように行われているのかを解明するとともに、「ダ体」を基調とした会話に見られる「デス・マス体」へのスピーチレベルシフトと「デス・マス体」を基調とした会話に見られる「ダ体」へのスピーチレベルシフトに注目し、その要因と機能について考察・分析することを目的とする。本稿で用いる「スピーチレベルシフト」といった用語の定義は日高・伊藤(2007)に従い、丁寧体（以下では「デス・マス体」と表記する）と普通体（以下では「ダ体」と表記する）という文末の「丁寧さ」に関する文体のレベルを「スピーチレベル」と呼び、談話の中で異なるスピーチレベル間の切り換えが起きる現象を「スピーチレベルシフト」と呼ぶ。

2 スピーチレベルに関する先行研究の概観

日本語の会話に見られるスピーチレベルの選択やスピーチレベルシフトについて、従来から多くの研究が行われてきた(宇佐美 2001、三牧 2002、陳 2003、伊集院 2004、申 2008 など)。これらの研究によってスピーチレベルの選択には、話者間の力関係による影響が見られること(宇佐美 2001)、会話中に 2 者間での相互交渉が行われていること(三牧 2002、伊集院 2004)、スピーチレベルの変化が起きやすい場面(陳 2003、申 2008)などが明らかにされてきた。今までの先行研究では、会話参加者の人数という観点からまとめると、2 者間の会話をデータとした研究が圧倒的に多い。3 者以上の会話をデータとした研究には、性別・親しさの度合いが異なる会話(大浜他 1998)、教師の授業場面の発話(横須賀 1999)、看護師同士の「申し送り」会話(永井 2007)を考察対象とするものしか見られない。これらの研究では、特定の相手との 1 対 1 のインタラクションと、1 人から全体に向けての発話で使用されるスピーチレベルが変化することが示されている。しかし、友人同士 3 者間の会話におけるスピーチレベルシフトの実態を解明する研究が見当たらない。3 者間会話では、2 者間会話あるいは 1 人から全体に向けての会話とは異なる機能を持ってスピーチレベルが使用されていると考えられるため、3 者間会話を考察する必要があると思われる。

一方、会話の性質という観点から先行研究をまとめると、初対面 2 者間の会話を考察対象とする研究が圧倒的に多い(宇佐美 1995, 2001、大浜他 1998、三牧 2002、陳 2003、伊集院 2004、申 2008、篠崎 2012、田所 2012 など)。その中で初対面会話における「デス・マス体」から「ダ体」へのスピーチレベルシフトの生起状況や機能が論じられており、会話参加者同士の上下関係または同世代の場合では時間軸に沿ったスピーチレベルの変化といった要因に注目した研究が多い。表 1 にまとめるように、友人同士の会話を考察対象とした研究は、管見の限り宮武(2007)しかないようである。

表 1 日本人同士の自然会話¹におけるスピーチレベルを扱う研究の分析観点

	初対面会話				友人同士の会話		
	上下	親疎	性別	時間軸	上下	親疎	性別
宇佐美(1995)	目上/同等/ 目下	初対面	同性(男/女)				
大浜他(1998)		初対面と友人混在(3 人)	異性	○			
宇佐美(2001)	目上/同等/ 目下	初対面	同性(男/女)/異性				
三牧(2002)	同学年/異 学年	初対面	同性(男/女)				
陳(2003)	同世代	初対面	同性(男/女)/異性				
伊集院(2004)	同世代	初対面	同性(女)	○			
宮武(2007)					同学年 or 同世代	友人	同性(男/女)/ 異性
申(2008)	同世代	初対面	同性(女)	○			

このように、従来の研究では、親疎関係の要因または親疎関係と上下関係が絡んでいる場合の要因についてはあまり解明されていない²。親しい相手との会話においてスピーチレベルがどのように選択・操作されるのかを明らかにする必要がある。本稿では友人同士 3 者間会話におけるスピーチレベルの使用実態とその効果を解明していくことを目的とする。

3 データの概要

3.1 データの収集

本稿はケーススタディとして友人同士 3 者間の会話をデータとして収集する。会話参加者は全員日本語母語話者で、関東付近にある某大学大学院に在籍中の大学院生である。データを収録する場所は大学院の研究室である。会話参加者に「20 分以上に自由会話をしてください」という指示を与えた後、録音・録画が始まり、実際 40 分程度で会話を終了させ、調査者が録音・録画を止める。データを収録する前、研究目的については伝えていない。

¹ 先行研究では、考察データの種類はドラマ・映画のシナリオ(上仲 2005、日高・伊藤 2007)、講演(谷口 2004)、インタビューのテレビ番組(足立 1995、三牧 1993)、談話完成テスト(山口 2002)、協力者の許可を得て収録した自然会話(宇佐美 1995、2001、大浜他 1998、陳 2003、伊集院 2004、申 2008 など)といったものがある。本稿では、会話参加者の相互作用を観察できる自然会話に準ずる会話データを考察資料として用いる。また、先行研究の概観においては当該データを用いた研究のみを扱うことにする。

² 先行研究の中で、日本人同士の初対面会話を考察対象とするもののほかに、学習者の接触場面や母語場面の初対面会話を考察対象とするものもある。本稿では前者のみを論じる。

3.2 会話参加者の関係

会話をする3者間(Y、O、T)の関係は、親しい関係にある仲の良い先輩後輩同士である。大学院生 Y(20代女性)、O(20代男性)、T(20代男性)は同じ研究室に所属しており、YはOより学年が1つ上で、OがTより学年が1つ上である。

3.3 文字化およびスピーチレベルのコーディング

収集した会話データは、宇佐美(2003)「改訂版:基本的な文字化の原則(Basic Transcription System for Japanese: BTSJ)」に従って文字化を行った。会話開始から終了までのすべての発話を対象として文字化した。

文字化したすべての発話文のスピーチレベルをコーディングする。スピーチレベルの分類基準は、次の表2が示すように、伊集院(2004)、申(2008)の分類基準を参考にする。

表2 スピーチレベルの分類

	文末	内容
デス・マス体	I	「デス・マス体の言い切り」 例) ~です。~ます。~でしょう。~てください。
	II	「デス・マス体+終助詞の機能を担う助詞」 例) って思うんですけど。実家は横浜ですが。
	II'	「デス・マス体+終助詞「ね」「よ」」 例) ですね。ですよ。ですよ。ですかね。
ダ体	III	「ダ体の言い切り」 例) 何学部?勉強した。すごい。なんで?
	IV	「ダ体+終助詞の機能を担う助詞」 例) 難しいけど。興味あったから。面白かったし。
	IV'	「ダ体+終助詞「ね」「よ」」 例) いいね。あるよ。~って感じだよ。
不明	*	中途終了型(述部がない発話) 例) もしできれば。~と思って。~へ行ったり。学部は?

4 考察

4.1 会話の全般における会話参加者のスピーチレベルの運用

本稿では、1つのケーススタディとして、上下関係のある親しい会話参加者 Y(女性/O、Tの先輩)、O(男性/Tの先輩)、T(男性/後輩)の3者間会話におけるスピーチレベルの使用実態について考察する。文字化したすべての発話文のスピーチレベルをコーディングするとともに、発話の指向性(当該発話が誰に向けられたものであるか)という観点から、発

話文の指向性をもコーディングする。劉(2011)で指摘されたように、発話の指向性という観点から、2 者間会話における発話を「他者向けの発話」と「自分向けの発話」に分けられる。2 者間会話とは異なり、3 者間会話における発話の指向性を分析する際に、当該発話は誰が誰に向けられたものであるかを「1 対 1」と「1 対全員」に区分する必要がある、やや複雑な様相を呈している。本稿では、次の会話 1 と会話 2 が示すような質問あるいは確認するための発話に絞って考察を行う。その理由としては、会話の流れや録画した映像を確認することによって、言語的・非言語的文脈情報から当該発話は誰が誰に向けて発するものであるかを確かめることができるので、発話の指向性のコーディングの信頼性を確保するためである。

(会話 1):

- 35 Y なんだろう、この味
→ 36 O おいしくないですか
37 Y おいしくない{笑}

(会話 2):

- 479 Y 結局地震の、二日後ぐらいに出発だったから一行けなくなっちゃってー
→ 480 O あ、でも結局行ってないですか?
481 Y 行ってなー//い

「質問・確認」の発話に限って考察した結果、Y、O、T の発話の中で「質問・確認」の発話が合計 188 例あり、それぞれのスピーチレベルの選択・操作の使用実態を表 3 で示す。

表 3 発話の指向性から見た 3 者間会話のスピーチレベルの使用実態

発話者	発話の指向性	スピーチレベル	質問・確認の発話数
Y	Y→O	Ⅲ	3
	Y→T	Ⅲ、Ⅳ'	12
	Y→全員	I (でしょう)、Ⅲ、Ⅳ'	17
O	O→Y	Ⅱ'、*	38
	O→T	I (でしょう)、Ⅲ、Ⅳ'	27
	O→全員	I (でしょう)、Ⅱ'、Ⅲ、Ⅳ'	25
T	T→Y	I (でしょう)、Ⅱ'、*	42
	T→O	Ⅱ'	3
	T→全員	Ⅱ'	21

(注：デス・マス体→I、Ⅱ、Ⅱ'；ダ体→Ⅲ、Ⅳ、Ⅳ'；中途終了型→*)

表 3 は Y、O、T の「質問・確認」の発話におけるスピーチレベルしかまとめていないが、表 3 から読み取れる結論は Y、O、T の発話全体においても同様な傾向が観察される。表 3 が示したように、Y は後輩の O、T に対して全般的に「ダ体」(Ⅲ、Ⅳ') で話していて、O は先輩の Y に対して基本的に「デス・マス体」(Ⅱ') で、後輩の T に対して基本的に「ダ体」(Ⅲ、Ⅳ、Ⅳ') で話し、また T は先輩の Y と O に対して全般的に「デス・マス体」(Ⅰ、Ⅱ、Ⅱ') で話していることが分かる³。

スピーチレベルシフトに関する今までの先行研究では、会話参加者の関係が比較的単純に設定され、初対面の「同世代」であるか「目上・目下」であるかの 2 タイプがほとんどである。その結果も「デス・マス体」から「ダ体」へのスピーチレベルシフトの生起要因などに注目されることが多い。本稿は、上下関係のある親しい会話参加者の 3 者間会話を考察することによって、実際の日常生活の中で我々がよく体験する友人同士の会話場面に注目し、親疎と上下関係が絡んでいる場合のスピーチレベルシフトがどのように操作・選択されるかという疑問に答える。表 3 の考察結果が示したように、Y、O、T のスピーチレベルの使用に関しては、上下関係や親疎関係をもとにした敬語の使い分けのように、誰にどのように話すかの規範的な意識が存在していることが示されている。親しい仲でありながら、上下関係も存在する場合では、上下関係の作用が優位に働いているようである。この考察結果が上下関係を重要視する日本のタテ社会の特徴に合致するのではないかと考えられる。この点の解明は日本語学習者の日本人の人間関係と言葉選択の関係に対する理解を深めることができると思われる。

4.2 スピーチレベルシフトの動的な操作・選択

前節で述べたように、本稿の分析対象とする上下関係のある親しい会話参加者(Y、O、T)の 3 者間会話において、会話をする 3 者は親しい仲であるにもかかわらず、会話のスピーチレベルは基本的に後輩が先輩に対して「デス・マス体」で、先輩が後輩に対して「ダ体」で話すことが分かった。しかし、このような規範的な意識に基づいたスピーチレベルの運用が存在する一方、会話の途中で起こるスピーチレベルシフトといった動的な現象も観察される。Y、O、T の 3 者間会話におけるスピーチレベルシフトの操作・選択は表 4 が示す通りである。

³ Y、O、T の発話の中に「デス・マス体の言い切り」(Ⅰ)で発話を終了するものがあるが、それはいずれも「でしょう」の形となっている。本稿では、こういった「でしょう」の使用を慣用的な用法と見なし、スピーチレベルシフトとは考えないことにする。

表 4 Y、O、T の 3 者間会話におけるスピーチレベルシフトの操作・選択

会話参加者 発話数	Y	O	T
「ダ体」発話数	170(54.1%)	75(34.4%)	24(8.7%)
「デス・マス体」発話数	19(6.1%)	101 (46.3%)	178(64.5%)
「中途終了型」発話数	125(39.8%)	42(19.3%)	74(26.8%)
総発話数	314(100%)	218(100%)	276(100%)

(注：デス・マス体→Ⅰ、Ⅱ、Ⅱ'；ダ体→Ⅲ、Ⅳ、Ⅳ')

Y、O、T の 3 者間会話におけるスピーチレベルシフトの操作・選択を考察する際に、考察対象となる発話は「ダ体」発話、「デス・マス体」発話、「中途終了型」発話の 3 種類の発話となり、あいづちや沈黙、笑い、他者の発話をそのまま引用する場合のものを除外した。考察対象となる発話の総数が 808 文である。表 4 から見られるように、「ダ体」を基調とした Y の発話の中で「ダ体」から「デス・マス体」へのスピーチレベルシフトが観察されると同時に、「デス・マス体」を基調とした T の発話の中で「デス・マス体」から「ダ体」へのスピーチレベルシフトも観察される。

では、Y、O、T の 3 者間会話において一体どういう場合にスピーチレベルシフトが行われているのだろうか。以下では Y、O、T の会話におけるスピーチレベルシフトの操作・選択の具体例を取り上げながら、その生起状況と機能について考察する。

4.2.1 「ダ体」から「デス・マス体」へのスピーチレベルシフト

表 4 が示したように、「ダ体」を基調とした Y の発話の中で、「ダ体」発話数が 170 文あり、Y の発話総数(314 文)の 54.1%を占めている。一方、わずかながら「デス・マス体」発話も 19 文観察され、Y の発話総数(314 文)の 6.1%を占めている。このように、「ダ体」を基調とした Y の発話の中で「ダ体」から「デス・マス体」へのスピーチレベルシフトが観察される。「デス・マス体」のスピーチレベルが使用された発話の会話内容を質的に分析した結果、「ダ体」から「デス・マス体」へのスピーチレベルシフトが使用される発話の会話内容の代表的なタイプとして、次の(1)から(3)の 3 つが観察された。

(1)常套句／会話開始・終了時の合図

今回の考察データの中で、「すみません」や「ごちそうさまです」「失礼しました」といった常套句や会話の終了時にスピーチレベルシフトが観察される。常套的に使われるものと考えられる。

(会話 3)(会話の始めに差し入れのお酒について話している)

7 O これあれでしょう？ 檀れいがやってるやつでしょう

- 8 Y あー
9 T わからないです
10 Y あの、おでん
11 O あ、知らない
12 Y {笑} おでん // でやってるいま
13 T ふんー
14 T みたことないな
15 O すみません。失礼しました。すみません // ほんとうにすみません
→ 16 Y /ごちそうさまです
17 T /はい
18 O じゃ、ごちそうさまです

(会話4)(YがOとTにゼリーが入ったウエハースのことを説明しようとしているが、全然相手に伝わらなかったのので、会話を終了する。)

- 1089 Y わかんないかー
1090 O 全然わかんない
1091 ◎◎◎(2.0◎◎◎)
1092 T それがあるんですか、常に
1093 Y あったりなかったり
1094 ◎◎◎(3.0◎◎◎)
→ 1095 Y はい、以上です

(2)相手への非難

相手を非難するような場合に「ダ体」から「デス・マス体」へのスピーチレベルシフトが観察される。その機能としては、スピーチレベルを変化させることで相手との心的距離をわざと置くことを示し、相手の言動に対する不満を表すことが考えられる。

(会話5)(OとTがYの発言を笑っている。それに対してYが「ちょっと聞いてください」と相手の言動を止めるように不満をこぼす。)

- 368 Y なんかフェアっていうか、/何周年か、とかだったりすると
369 T /フェア
370 O うん
371 T ああ
372 Y もうその//
373 T /特集なんじゃないですか？
374 Y そう、特集みないな

375 O フェアって(笑)

376 T フェアって(笑)

→ 377 Y ちょっと聞いてください

(3)対立する立場や意見の提示

対立する立場や意見を表明する際に、Yの発話の中で「ダ体」から「デス・マス体」へのスピーチレベルシフトが観察される。(2)と同様に、相手と対立している状態において、スピーチレベルを変化させることで相手との心的距離を置くことを示し、相手の言動に同意しないことや相手の立場に妥協しないことを示すことが考えられる。

(会話6)(YがOとTにゼリーが入ったウエハースを説明しようとしているが、なかなか分かってもらえなかった。そこでYは自分の立場を譲らず「そういうものがあるんですよ」と自分の立場を主張している。)

1059 Y あと、ああいうのも、なんかゼリーが入ったウエハース、ピンクとか、みどりとかした

1060 (4秒)

1061 O {笑い}

1062 Y あるじゃん

1063 Y {笑い}

1064 O 何ですか、ゼリーが入ったウエハー//ス

1065 T //今

1066 Y /なんかゼリー状の何かが入っ//たー

1067 T /2対1ですよ、今

1068 Y //いやいや今わかるから、今

1069 O /何だろう、それは

1070 T&O&Y {笑い}

1071 Y //今

1072 T /8分の5チップより

1073 Y {笑い}

1074 T 悪いですよ、今

1075 Y あれ?//こういう四角のさー、キューブ状で

1076 T /立場

1077 T うん

1078 Y 間になんかゼリーが入っ、ゼリーっていうかなんかプルプルぐにやっとした

1079 O え、ウエハースはどこいったんですか?

- 1080 Y ウエハースもこう重ねてあって
 1081 (2.0@@@)
 1082 Y えーっとー
 1083 T 分が悪いですよ、今
 1084 O なに自分
 → 1085 Y えーっとー、そういうのもあるんですよ
 1086 O {笑い}
 → 1087 Y あるんです
 1088 @@@(1.0@@@)
 1089 Y わかんないかー
 1090 O 全然わかんない

会話6では、Yはゼリーが入ったウエハースのことをOとTに説明しようとしているが、それがどういうものかなかなか相手に分かってもらえなくて、結局説明するのを諦めて1085行目と1087行目で「そういうのもあるんですよ」「あるんです」と言い張っている。会話6の発話内容より少し前の会話において、Tの発話「今、Yの立場は8分の5チップ(の話の時の話が分からなかったOの立場)より悪い」があるように、YとO、Tとの間に知識の差があって、対立する立場(分かってほしい ⇔ 全く分からない)にある。この場合ではYは最後に開き直って自分の守備範囲を守ろうとしている。「ダ体」を基調としたYの会話の中で、こういった話し手の立場や心情の変化を示したり、聞き手との心理的距離を意図的に置いたりする場合に、「デス・マス体」発話へのスピーチレベルシフトが起こりやすい。

4.2.2 「デス・マス体」から「ダ体」へのスピーチレベルシフト

表4が示したように、「デス・マス体」を基調としたTの発話の中で、「デス・マス体」発話数が178文あり、Tの発話総数(276文)の64.5%を占めている。一方、「ダ体」発話も24文観察され、Tの発話総数(276文)の8.7%を占めている。このように、「デス・マス体」を基調としたTの発話の中で「デス・マス体」から「ダ体」へのスピーチレベルシフトが観察される。「ダ体」のスピーチレベルが使用された発話の会話内容を質的に分析した結果、「デス・マス体」から「ダ体」へのスピーチレベルシフトが使用される発話の会話内容の代表的なタイプとして、次の(1)から(2)の2つが観察された。

(1)自分の意見や心情を一方的に表出する

自分の意見や心情、気持ちなどを一方的に表出する場合、つまり当該発話是对話する相手の立場や意見に対して発するものではなく、第三者の意見に対して自分の意見を述べたり自分の気持ちや心情などを表出したりする場合に「デス・マス体」から「ダ体」へのス

ピーチレベルシフトが観察される。その機能としては、相手の立場や意見との関わりが薄く、聞き手を特に意識していないことを示すと考えられる。

(会話7)(地震直後)

509 T /そうです。僕、車乗って普通にあの一(1.0秒)普通にじゃないですけどー、
ナビの、

510 Y うん

511 T で、テレビついてるんでー、それでニュース見ててー

512 Y うん

513 T もう部屋の中、もうテレビはひっくりかえるわー

514 Y うんうん

515 T //もう

516 O /ふーん

517 T ウィスキーじゃないや、えーと、ブランデーが割れるわー

518 Y わっ

519 O 一気だね

520 T CDは落ちるわー、で、もう

521 Y わわわ

522 O //なんで

→ 523 T /すごい

会話7では、YとOの後輩であるTの「デス・マス体」を基調とした会話の中で「ダ体」発話が観察される。513、517、520、523行目におけるTの発話は、地震直後の自分の部屋の状況(事実)やそれを見た自分の心情を臨場感たっぷりに再現しようとしていて、聞き手を自分の話に引き込もうとするものである。こういった場合のTの発話は聞き手を意識しない発話として捉えられるため、「デス・マス体」から「ダ体」へのスピーチレベルシフトが生起しやすい。

(会話8)(Oの発話にある「生姜女子」という言葉を聞いて、Tはいま流行っている「～女子」の用法について自分の意見を述べている。)

51 O 生姜流行っているらしいよ

52 Y うんー

53 O 生姜女子っていうらしいよ

→ 54 T 何でもかんでも女子をつけりゃいいわけじゃないよ

会話8では、Tが「生姜女子」という今流行っている言葉について、「何でもかんでも女

子をつけりゃいいわけじゃないよ」と自分の意見を述べている。「生姜女子」という言葉は先輩 O の発話に出てきたものではあるが、それが O が名付けたものではなく、ただ O に引用されたものである。T がそれに文句を言ったのは O に対するのではなく、いわゆる第三者(今流行っている言い方そのもの)に対するものである。こういった場合に「デス・マス体」から「ダ体」へのスピーチレベルシフトが観察された。会話 8 における T の発話も聞き手の立場や意見との関わりが薄く、第三者に対する話し手の意見を一方的に表出するものと考えられる。

(2) 繰り返し

相手の話を繰り返す場合に「デス・マス体」から「ダ体」へのスピーチレベルシフトが観察される。次の会話 9 が示すように、繰り返しの場合は相手の発話を引用するような役割を果たしており、特に対人関係の調節作用が見られないと考えられる。

(会話 9)(ラジオの良いところについて)

408 Y だから、そこがラジオ

409 O {笑い}

410 Y どう使い//使えるかみたいな

→ 411 T /{笑い}そこがラジオ

4 節では、Y、O、T の 3 者間会話におけるスピーチレベルシフトの操作・選択の使用実態およびその機能について論じた。従来の初対面会話を考察した先行研究とは異なり、本稿は友人同士 3 者間の会話を考察することによって、「デス・マス体」から「ダ体」へのスピーチレベルシフトの生起について論じただけでなく、「ダ体」から「デス・マス体」へのスピーチレベルシフトの生起状況やその機能についても述べた。「ダ体」から「デス・マス体」へのスピーチレベルシフトは意見や立場が対立している場面において、話し手が相手と心的距離をわざと置くことによって自分の意見を堅持する場合での使用が多く観察された。また、常套句の使用として「ダ体」から「デス・マス体」へのスピーチレベルシフトも観察された。一方、「デス・マス体」から「ダ体」へのスピーチレベルシフトは主に聞き手のことを特に意識していない場面で自分の意見や心情を一方的に表出する場合での使用が多く観察された。

5 今後の課題

本稿では、一つのケーススタディとして、上下関係のある親しい友人同士 3 者間の会話におけるスピーチレベルシフトの使用実態およびその機能について考察した。今後の課題として、友人同士 3 者間の会話データを増やし、より多くの会話データを考察することによって、本稿の結論を検証するとともに、友人同士 3 者間会話におけるスピーチレベルシ

フトの生起状況や機能に関する議論をさらに深めていきたい。

参考文献

- 足立さゆり (1995)「日本語の会話におけるスピーチ・レベル・シフト」『拓殖大学日本語紀要』5: 73-87,拓殖大学留学生別科.
- 伊集院郁子 (2004)「母語場面による場面に応じたスタイルスピーチスタイルの使い分け—母語場面と接触場面の相違—」『社会言語科学』6-2: 12-26.
- 上仲淳 (2005)「テレビドラマの登場人物にみるスピーチレベルの様相」『姫路独協大学外国語学部紀要』18: 291-310,姫路獨協大学外国語学部.
- 宇佐美まゆみ (1995)「談話レベルから見た敬語使用—スピーチレベルシフト生起の条件と機能—」『学苑』662: 27-42,昭和女子大学近代文学研究所.
- 宇佐美まゆみ (2001)「「ディスコース・ポライトネス」という観点から見た敬語使用の機能—敬語使用の新しい捉え方がポライトネスの談話理論に示唆すること—」『語学研究所論集』6: 1-29,東京外国語大学語学研究所.
- 宇佐美まゆみ (2003)「改訂版：基本的な文字化の原則(Basic Transcription System for Japanese: BTSJ)の開発について」『多文化共生社会における異文化コミュニケーション教育のための基礎的研究』平成13-14年度科学研究費補助金基盤研究C(2)(研究代表者：宇佐美まゆみ)研究成果報告書, 4-21.
- 大浜るい子・鈴木雅恵・多田美有紀 (1998)「自由談話に見られるスピーチレベルシフト現象」『教育学部研究紀要』44(2): 389-397,中国四国教育学会.
- 篠崎佳恵 (2012)「初対面二者間会話におけるスピーチレベルの変遷とその要因—普通体の指標的意味に着目して—」『桜美林言語教育論叢』8: 15-28,桜美林大学言語教育研究所.
- 申媛善 (2008)『文末スタイルの運用に関する日韓対照研究—人間関係の変化とポライトネス・ストラテジーの関わり—』筑波大学博士(言語学)学位請求論文.
- 田所希佳子 (2012)「初対面二者間会話におけるスピーチレベル教育に関する考察—言語面と意識面に注目して—」『待遇コミュニケーション研究』9: 81-96,待遇コミュニケーション研究会.
- 谷口まや (2004)「日本語の講演の談話におけるスピーチ・レベル・シフトの形態と機能」『早稲田大学日本語教育研究』4: 117-129,早稲田大学大学院日本語教育研究科.
- 陳文敏 (2003)「同年代の初対面同士による会話に見られる「ダ体発話」へのシフト—生起しやすい状況とその頻度をめぐって—」『日本語科学』14: 7-28,国立国語研究所.
- 永井涼子 (2007)「看護師による「申し送り」会話の談話交替管理—スタイルシフトを中心に—」『日本語教育』135: 80-89.
- 日高水穂・伊藤美樹子 (2007)「スピーチレベルシフトの表現効果—シナリオ「12人の優しい日本人」を題材に—」『秋田大学教育文化学部研究紀要 人文科学・社会科学』62: 1-12,秋田大学.

- 三牧陽子 (1993)「談話の展開標識としての待遇レベル・シフト」『大阪教育大学紀要』第1部門(人文科学)42(1): 39-51,大阪教育大学.
- 三牧陽子 (2002)「待遇レベル管理からみた日本語母語話者間のポライトネス表示—初対面会話における「社会的規範」と「個人のストラテジー」を中心に—」『社会言語科学』5(1): 56-74.
- 宮武かおり (2007)「日本人友人間の会話におけるスピーチレベルの使用実態」『TUFSS 言語教育学論集』2: 19-31,東京外国語大学大学院地域文化研究科言語教育学講座.
- 山口和代 (2002)「ポライトネスに応じた言語形式と人間関係の認知—中国人ならびに台湾人留学生と日本人母語話者との比較の視点から—」『社会言語科学』5(1): 75-84.
- 横須賀柳子 (1999)「授業場面における教師のスピーチ・スタイル」『ICU 日本語教育研究センター紀要』9: 61-76,国際基督教大学日本語教育研究センター.
- (劉雅静 对外經濟貿易大学外国語学院)

A study on the speech level shift among people both having equal friendship and superior/ subordinate relationship

LIU Yajing

This paper attempts to illustrate the principal rules of the speech level shift among people both having equal friendship and superior/subordinate relationship. Based upon the conversation study among three close friends, this paper reaches the following arguments. Firstly, the speech level in a conversation involving both equal friendship and superior/subordinate relationship is basically decided by superior/subordinate relationship. Secondly, there always exists a shift from “DA” to “DESU/MASU” when: 1) a sentence is used as a customary usage or a conversation ends; 2) one person criticizes the others; 3) one person provides opposite opinions. Such a speech level shift is applied as a strategy to keep a psychological distance intentionally so as to be stick to one’s own opinions. Thirdly, there appears a shift from “DESU/MASU” to “DA” when: 1) one tries to express his own views or feelings; 2) one repeats other’s words. Such a shift indicates an indirect link between the conversation content and opposite opinions from others.